

第220回くらしの植物苑観察会 2017年7月22日(土)

## - 縄文時代のウルシと漆 -

工藤 雄一郎 (国立歴史民俗博物館研究部考古研究系 准教授)

漆文化はウルシという植物が存在してはじめて成立する文化である。縄文時代において、多数の漆器が出土する以上、その背景としてウルシ林が縄文時代にも存在していたことは容易に想像できる。しかし、植物としてのウルシが遺跡出土資料として認識できるようになったのは、実はまだこの十年ほどに過ぎない。ウルシ材の同定が可能となったのは2002年である。その後、能城修一らの研究によって、縄文時代後期の東京都下宅部遺跡の杭群のなかにウルシが83点見つかかり、その中44点に線状の傷跡がある資料がみつかった。下宅部遺跡では多数の漆器や漆工用具が出土しており、そのような遺跡のすぐ近くにはウルシ林が確かにあり、縄文人がウルシに傷を付けて樹液を採取した後、伐採して杭として利用していたことが初めて明らかになった。

縄文時代のウルシの樹液採取方法は、現代の採取方法と大きく異なっている。幹を1周する傷を10~15cm 程度の間隔で付けていくもので、出土するウルシ材の径も5~10cm 程度のものが多く、現在よりも細いウルシの木が中心のようである。このような方法で、漆器を作るのに十分な樹液を確保できたのだろうか。筆者等は、茨城県常陸大宮市のウルシ植栽地で「壺木呂の会」などの協力を得て石器による漆掻き実験も行っており、鉄製の刃物ではなく石器で傷を付ける場合には、樹皮が薄い若年木のほうが効率が良いだろうという見通しを得ている。また、ウルシは伐採後の萌芽更新が旺盛であり、若いウルシの木で樹液を採取し、すぐに切り倒した後、萌芽した幹から数年後に新たな樹液を採取するやり方は、実際には効率的なのかもしれない。縄文時代の漆液採取の方法の解明はまだまだこれからである。



.....

**次回予告** 第221回くらしの植物苑観察会 2017年8月26日(土)

「変化朝顔の形のひみつ」 仁田坂 英二 (九州大学大学院 講師)

10:00~12:00 (予定) 苑内休憩所集合 申込不要